

巻頭言

「いのち」を捉える視座

仏教文化研究所研究員

河 智 義 邦

近年、仏教関係者の間で〈いのち〉について表記する場合に、「命」ではなく、「いのち」と平仮名表記されているケースが多いようです。そうした表記の背景には、いかなるものも縁起的存在であり、独立存在・独立生成することは不可能であり、相依相関の上に生成・存在しているという仏教の基本思想があります。教育学関連の本にも「いのち」と表記されたタイトルのものが多くあり、「いのちの教育」を論じる本には、人間の営みを単に「命」すなわち身体的としてだけでなく、精神的・社会的な側面を併せ持つ統合体であることを視野に入れて考えていきたい、といった趣旨のことが記されていました。仏教思想と通底するものを感じます。（「生命」の表記を使用する論文や本では、「命」「いのち」、どちらの意味も見受けられます。）

宗教哲学者の武田龍精博士は、『宗教と科学のあいだ』の中で、仏教が説く縁起的存在論を「あいだ」という概念を用いて解釈されています。普通ふたつの「もの」の实在が前提となって、両者の「あいだ」がはじめて問われると考えます。主観と客観、自己と他者、時間と空間、身体と精神等の二極対立概念として表現されている「あいだ」においても、普通はそのような仕方で捉えられています。しかしながら、仏教の縁起観に基づくとそのような考え方は顛倒した見方であることを、龍樹の「父と子の譬喩」などを紹介して、「あいだ」においてはじめてふたつの「もの」の实在が成り立つのであり、この「あいだ」にこそ真の实在 (reality) は顕わとなると指摘されています。そして博士は、宗教が「いのち」ある宗教となるためには、科学との「あいだ」

を問い続けていく必要性があることを強調されています。つまり、縁起的統合体としての人間（いのち）の問題は、多様な視点で捉えなければならぬということを指摘されているものと理解できます。

今回の紀要では、研究論文とともに、当研究所開所十周年記念式典において「いのちの尊厳」と題して開催したシンポジウムの記録を掲載しています。そこでは、「いのち」にまつわる現代の諸問題に対して、宗教哲学・仏教学・真宗学の立場から「あいだ論」をふまえた応答がなされ、さらには諸科学との関わりにおいて、いかなる可能性を見いだせるか等、多様で多層的な視座が提示されています。

2012年 5月20日

※記念シンポジウムの編集作業が遅くなり、2年越しでの掲載となってしまいました。シンポジストやコーディネーターを務めて下さいました先生方には多大なご迷惑をおかけいたしました。記してお詫び申し上げます。